

私にとっての「研究」とは

―教員としての「研究」と研究者としての「研究」の違い―

前回は、学校現場で取り組んできた私の「研究」について書かせていただきました。今回は、私の大学院での経験から、教員としての「研究」と研究者としての「研究」の違いについて書かせていただきます。

私は2018年に現職派遣制度を使わせていただき、兵庫教育大学教職大学院（専門職学位課程教育実践高度化専攻授業実践開発コース）に進学しました。入学前の大学院説明会にて、「現場での実習を課しているため、大掛かりな修論ではなく、報告書の作成でよい。」と聞いていましたから、私は勤務校の力にもなれるし、研究も「楽できる」思っていました。また、10年以上校内研究を推進してきたのだから、大学院の勉強にもついていけるだろうという自負がありました。

ところがいざ入学してみると、これらの考えは一瞬で消え去りました。まず、院生仲間のレベルの高さに驚きました。現職院生はもとより、学部卒業後のストレート院生の感性や能力の高さにも驚きました。「井の中の蛙大海を知らず」の諺の意味を体感しました。また、講義内容が私にとってたいへん難しく、かつ充実していたため、周囲の院生と自分を比較し、俗に言う「落ちこぼれ」の気持ちを味わいました。その上、「授業実践開発コースは、実習も行い、修論並みの報告書を書く。」という先生方の言葉に、「楽できる」という甘い考えは吹き飛ばされました。大学院生活は、私の人生の中で最も勉強した2年間となりました。

このような大学院生活の中で、「研究」の違いを痛感しました。

教員としての「研究」は、「いかにして授業を作るか」に重点を置いてきました。しかし、未熟ながらも一介の研究者としての「研究」は、「いかにして授業を作るか」はもちろんのこと、「授業を分析し、その効果をいかにして明らかにするか」にも重点を置く必要がありました。ある講義の中で、『研究』とは **discover**、つまり **cover**（ベール）を **dis**（剥ぐ）こと、真実を明らかにすることだ。」と教えていただいたことが、とても印象的でした。

また、「書く」ことの違いも痛感しました。学校現場で授業実践のまとめを執筆する時は、今までの経験やその時々感覚を頼りに、「何となく」で書くことができていました。しかし、研究者としての文章には、必ず裏付けとなる根拠が必要でした。たった1行の文を書くのに、文献を探し、それに基づいた自分の考えを論じることがとても難しく感じました。

さらに、教員としての私は、授業の成果を自分にとって都合のいい児童の感想だけを基にして論じてきました。しかし、研究者としては、きちんとしたデータに基づき、良くも悪くも客観的に授業を分析する必要がありました。必ずしも自分にとって望ましい結果でなくても、それを受け止め、論じなければなりませんでした。

これらの「客観的なデータをもとに分析し、根拠を明らかにして論じる」ことが、教員と研究者との「研究」の違いだと私は考えます。

余談になりますが、大学院での2年間を通して、「成長した！」と実感することがあります。それは、批判的な意見をいただくことが心地よくなったということです。

教員としての私は、事後研究会等で批判的な意見をいただくと、「こちらの考えもわかっていないくせに。」などと不機嫌になり、素直に受け止めることができませんでした。大学院入学後もそれは続きました。しかし、いつしか批判的な意見をいただいた翌日には、それが納得できるようになり、気付けば、批判的な意見を自ら求めるようになっていました。

これはきっと、「研究」が自分一人ではできないことを自分自身が受け止めたからだと思っています。

教員としての私の「研究」は、前述したように、自分が授業を作り、自分の望むような成果をまとめれば済んでいました。多くの先生方は、このようなことはないと思いますが、少なくとも私は独りよがりな「研究」をしてきました。ところが、研究者としての「研究」は、客観性や一般性が求められます。独りよがりな自己満足では通用しません。本当にこれでいいのかと常に不安に駆られます。多くの方の視点から多面的・多角的に評価してもらうことで、私はようやく安心できました。だからこそ、批判的な意見を求めるようになったと思います。

「研究」の違いを通して、私は成長することができたと思っています。

そして、さらなる成長と批判的な意見を求めて、いろいろな学会に参加させていただくことになります。次回は、「学会で学ぶ」ということについて書かせていただきます。

(加古川市教育委員会 伊藤良介)